館は、それが一定の方向にキチンと進んでいくようお手伝いをしていきたいと思っています。いってみればだれかに頼めばなんとかなるというような社会教育がずっと行われてきたところに育つ芽も育たなかったのではないだろうかと、率直に反省しており、いま徐々に転換をしているところです。

**清　水**・どうもありがとうございました。そのほかに会場のほうから提言される方はありませんか。

**花　岡**・青年会議所の花岡有一と申します。私はこの大館ほど住みよいところはないと考えています。この大館には、大きな観光資源はないけれど、曲げわっぱ、秋田犬、曲田の聖堂などすばらしいものがあります。今日お集りの皆さんには郷土を誇りに思う心を大切にしていただきたいし、その心が最終的には教育や観光、産業にもつながっていくだろうと思います。また、この大館の秀れた先人には安藤昌益さん、鳥潟博士、上原敏さんがおられます。こういう方たちを顕彰することから始めたらどうかと思います。

**菅　原**・私は老人クラブと芸文連の代表をしている菅原保です。私たちは大館のいいところをもう一回見つめ直して、いいところはいい、悪いところはどこなんだというところをはっきりつかんで、各団体の幹部の方々が率先してがんばってほしいと思います。

**青　柳**・連合婦人会の青柳珠代です。先ほど青年会の方のお話をお伺いしておりまして、なんだか施設がないから困るというような話をしておりましたが、やる気になれば市内には施設はいっぱいあるのでどこでもできると思います。そう弱音をはかないで、これから大館を背負って行く方たちですので、大いに新しいものをどんどん開発していってほしいものです。

青柳さん

**畠　沢**・農協に勤めています畠沢成治です。〝文化砂漠〟ということで文化の殿堂市民文化会館ができたわけですが、それを活用するいわゆるソフトウェアの部分の人づくりというのがすごく大変だと感じています。また文化活動を活発にするためには、各分野のグループ相互のコミュニケーションを図り、大きな文化活動にしていきたいと思います。

## まとめ

**清　水**・それでは最後に先生方から今日のシンポジウムについてのご感想をお願いします。

**渡　部**・大館はこれから何を目指すのか。私は知的興奮が満ちた、そして学問とか文化が尊重される風土づくりを根底においていただきたい。せっかく松下村塾というものがあるのですから、そこをベースにして先人先覚の足跡をまず学ぶということです。第二点の地域経済活性化については、一回倒産してよみがえった人たちを集めてじっくり話を聞くという講座を松下村塾でやっていただきたい。その中には貴重な教訓、すばらしいノウハウが秘められているのです。ご当地に欠けているのはそういう点じゃないかと思います。この人たちから、知識と情報を知恵と才覚に変えていく力を学びなさい。三番目は、四つの「ばり」を追放してほしいと思います。一つは「見えっぱり」。それから「さっぱり稼がない」ですね。「足引っぱり」これも引っぱるなら手を引っぱってほしいですね。もう一つは「強情っぱり」はやめてほしい。要するに「石橋をたたいても結局渡ろうとしない」気風だけは早めに追放しようということです。最後にこういったシンポジウムは一回ではしょうがないですね。まあ三年ぐらいはやってほしいと思います。

**山　本**・青年会議所の事業の一つとして、これをやるのじゃなくて、このシンポジウムによりどこまでやる気をおこすかということだと思います。そういう意味で、活性化の原動力になるように継続して取り組んで、そして実現への一歩としていただければありがたいと思います。

**三　宅**・今日参りまして本当に心がうたれたのは、ここにお集まりになっているのがほとんどが若い人であるということと女性がずい分参加されているということです。こういうふうに若い人で熱気あふれる会議というのは初めてです。そういう意味において、大館は大丈夫だなという感じを強く持ちました。女性を入れた若い人たちが本当に大館市のことを考えれば大館はきっとよくなると思います。曲げわっぱについて少し話しますが、いまの曲げわっぱのデザインだけでは、買ってくれる人は少ないし、大館の顔にもなりません。この曲げわっぱをもう一つ上のモードの段階まで上げ、そして売り出していくことが必要だと思います。いま人間の価値観がだんだん変ってきており、非常にいい時期、文化の時代に入っていますから、みんなで考えてやれば大丈夫だと思います。

清水教授

**清　水**・皆さんのご提言やアドバイスのお話を拝聴して感じたことをお話ししたいと思います。従来、行政の支援があれば自分たちはこれができるよという姿勢からですね、自分たちにはこれができるから行政でも支援してほしいというように発想を転換していかなければいけないと思います。すなわち大館の皆さんのやる気ということです。二十一世紀は、国際化社会、高齢化社会、情報化社会……といわれていますが、これは地域間競争の社会なんです。大館の人が自ら地域を創造するとき、秋田県の六十八市町村は敵なんですね。その中でシノギを削って大館を残していかなければなりません。そんなとき誘致企業が来ないから、人の和がないから、高速道路がないから、自分たちの地域はよくならないといったグチがよく聞かれます。もし何もないのなら、なんでもできるんだという発想にかえていただきたいと思います。また先ほどお年寄りの方がお話をされましたが、お年寄りの方々はいろんな知識を持っておられます。ちょうどいい社会参加が、何か大館でできるとすれば、すばらしいと思います。

**市　長**・熱心なディスカッションをしていただき、なんか先が見えてきたような、勇気がわいてきたような感じがしています。当市の素材型産業は、このとおり大変な不況にさらされています。なんとかして早い時期に脱皮したいし、自らの力でこの地場産業をなんとかしなければいけないと考えています。それに必要なことは、知恵と勇気を、そして具体的に行動を伴って付価価値を高める地場産業の転換を図らなければならないと思いますし、一方では企業誘致も熱心にがんばっていこうと思っています。それに大事なことは、若い方々にじょうずに世代の交代を図らなければ時代に乗り遅れてしまうのではないかと思っています。討論の中にもありましたが、石橋をたたくことも結構ですが勇気をもって渡っていく、そういう体質に中身を変えていかなければ、いつまでたっても脱皮できないと思います。渡部先生からもご指摘ありましたように、回を重ねて本物化していきたいと思います。

※編集の都合によりシンポジウム内容の一部を割愛させていただきました。ご了承願います。